

1999年度 プロジェクト研究報告

(1999. 10. 1～2000. 3. 31)

プロジェクトA I

社会と認知

代表者◇高木和子(文)

プロジェクトB I

ヒューマンサービス

代表者◇望月 昭(文)

第6回研究会 (1999. 10. 6)

テーマ：来年度の実験計画

2000～2002年度のプロジェクト研究についてどのようなテーマで申請を行うかを話し合った。各々の持つ方向性を考慮した結果、テーマは「子ども時代の『ともだち』—相互作用場面での他者理解の視点から—」とし、3年間で申請する事を決め、今回の研究会は終了した。 【松本将樹(文学研究科)】

第7回研究会 (1999. 11. 24)

テーマ：中間報告会

来年1月提出予定の教科研報告書作成の各々の途中経過について報告を行った。また、それらの内容に関して議論を行い、今後の指針について検討した。今回の検討した内容に基づき、次回の研究会で報告を行なう予定である。 【松本将樹(文学研究科)】

第2回研究会 (1999. 10. 25)

テーマ①「『連携』と実験的行動分析学」

②「日本のしつけ論」

報告者①藤 健一氏(理工学部教授)

②門田幸太郎氏(産業社会学部教授)

研究代表者望月昭氏から、第2回研究会の主題について説明があったのち、2つの話題の提供があった。

「連携」と実験的行動分析学(藤健一報告)が、18:30から19:15まで報告された。報告の主旨は次のとおりであった。(1)現在の「心理学」の他の学問領域での「普及」の一例として、立命館大学理工学部の開講科目(1999年度)中の、心理学関連の内容を取り扱っている科目の現況が分析紹介された。(2)ヒューマンサービス領域で、実験的行動分析学がそれらの連携に貢献する「方法論」としての可能性について、「行動の据え方」「研究計画法」の観点から意見が提出された。(3)更に、実験的行動分析学の方法論の普及の現況について、文献的分析の一例が紹介された。

(4)大学教育における「方法論の習得と訓練」について意見が提出された。

文化と「人格形成」(門田幸太郎報告)が、

19:15から21:05まで報告された。報告の主旨は次のとおりであった。(1)乳幼児期からの社会的学習と文化との関連について、(2)文化のありかたとしての子育てについて、研究紹介があった。(3)文献紹介として「広田照之(著)日本人のしつけは衰退したか(講談社)1999」が取り上げられた。その各章について紹介があり、地域共同体と学校、家庭との関連の変遷を機能の観点からの分析の可能性について、意見の交換があった。

【藤健一(理工学部)】

・ 第3回研究会(1999.12.1)

テーマ①「生体ウルトラディアン・リズム」
②プロジェクト研究の今後の進め方
について(打ち合わせ)

報告者①齋藤 稔正氏(文学部教授)

まず、望月教授から、ヒューマンサービスに関わる概念や機能についての説明や、研究会の目的が述べられた。

次に、齋藤教授が、ウルトラディアン・リズムについて報告を行われた。リズムの種類や、特に意識水準のリズム(覚醒とトランス)についての説明が行われた。ヒューマン・サービスとの関わりについては、治療やサービスの提供時の意識状態を考慮する必要性が提言された。

討論の時間には、生体のリズムと脳のリズムの関係や、リズムと日常活動の関連について、活発な議論が行われた。

【小森伸子(文学研究科)】

第4回研究会(2000.3.31)

テーマ: ヒューマンサービスと

Qualitative Research

①『教祖』や『消耗品』ではないサービス・プロバイダーであり続けるには

—『社会的妥当性』をラディカルに考える—

②Qualitative Researchとフィールド心理学

③99年度総括と今後の展望

報告者: ①武藤 崇氏(筑波大学)

②佐藤 達哉氏(福島大学)

今回は、標記のテーマのもとで、実践現場から課題として提出されたヒューマンサービス行為の機能の中の「援護」に関する記述方法の課題として、質的研究(Qualitative research)の問題を扱った。まず武藤氏より、トイレット・トレーニングの施行にあたり、親とのインフォームド・コンセントを含めた実践内容に関する表現・報告形態に関わる問題として、エスノメソドロシー、グラウンデッド・セオリーなど質的研究の関連方法論の推移が紹介され、ヒューマンサービスの領域における技法論にとどまらない本来の意味での方法論の吟味の必要性が展開された。佐藤氏からは、モード論などからみた心理領域における研究活動の言語的報告の場の整備の問題という角度から討論がなされた。

【望月昭(文学部教授)】

プロジェクトBⅡ

「学び」の構造

代表者◇佐藤 敏二（法）

第2回研究会（1999.10.27）

テーマ：研究報告書作成に向けて

1999年度までの調査結果と研究会での討論内容をふまえて、プロジェクト研究会全体の報告書の内容と構成、執筆分担について意見交換を行い原案の作成を行った。

【長澤克重(産業社会学部)】

第3回研究会（2000.1.15）

テーマ①1998年度データの分析

②プロジェクト報告書に向けて
—執筆分担と今後のスケジュール

①1998年度に実施したアンケート調査データについて、全体的な特徴について分析結果を討論した。学生の勉学実態と学部毎のカリキュラムの特徴との関連、学習到達度自己評価と身についた能力との関連、課外活動で身についた能力の特徴、就職活動で身についた能力について、主に議論が集中した。

②プロジェクト全体の報告書をまとめるにあたって、各メンバーの担当部分の分担と今後のスケジュールについて確認した。

【長澤克重(産業社会学部)】

プロジェクトBⅢ

戦後教育の成立と転回

代表者◇小山静子（文）

第4回研究会（1999.11.6）

テーマ①新制中学校 —その整備への歩み—

②1950年代・60年代における京都の高等学校生徒会活動

報告者①菅井 鳳展氏（文学部教授）

②富岡 勝氏（京都大学）

①新制中学校の施設、設備の整備状況や各中学校の教育・学習活動の実態を、1950年から1957年までの『京都新聞』を中心に分析した。その結果、発足後まもない新制中学校が、校舎の建設・増改築、あるいは設備・備品の整備をいかにして行い、PTAがどのような役割を果たしたのか、明らかになった。また、生徒の手による学校づくりや地域に根ざした教育活動が行われるなど、この時期の中学校教育の特質も明らかになった。

②京都市内の高等学校生徒会の活動状況を、特に政治教育に果たした意味という観点からとりあげ、京都府高等学校生徒会連絡協議会（生連協）の活動や教員の生徒会指導方針などを検討した。 【小山静子(文学部)】

第5回研究会 (1999. 11. 27)

テーマ①教育委員会法下の京都市、京都府委員会の実際 (その2)

②新制高校における小学区制の成立とその課題

報告者①小股憲明氏 (大阪女子大学)

②小山静子氏 (文学部教授)

①京都府教育委員会の機関誌である『教育展望』を1949年から1953年まで分析することを通して、教育委員会の活動状況や教育行政の課題を明らかにした。

②高校3原則の1つである小学区制は、京都においては1948年から1985年まで実施されていたが、1961年以降、京都は小学区制が行われている全国で唯一の都道府県であった。どうして京都では小学区制が維持されたのか、そしてなぜ1985年になって制度が変わったの

か考察するために、小学区制の下でどのような課題が存在していたのか、1950年代前半、1960年代後半、1970年代後半の3つの時期にわけて検討した。 【小山静子(文学部)】

第6回研究会 (1999. 12. 25)

テーマ：青少年に対する社会道徳の形成

報告者：中村隆文氏 (神戸女子大学)

府議会と市議会の議事を検討しながら、青少年の非行や犯罪がどのようにとらえられていたのか、そしてその原因がどこにあると考えられていたのか明らかにした。

【小山静子(文学部)】

